

「アマゾン先住民の文化と暮らし」 — シンゲー国立公園及びその周辺地域の開発について —

南 研 子

NPO 法人 熱帯森林保護団体代表

1. 背景&支援事業

(1) 活動内容 (概要)

— 背 景 —

アマゾンの森林面積は世界全体の 1 割以上といわれ、世界の熱帯林の 30%を占めている。現在アマゾンの熱帯林は全体の約 25%以上が消滅した。緑の絨毯と呼ばれる森の林冠は豊のように映るが、熱帯は高温多湿のために、土壌中での有機物の分解は極めて早く、植物の生育を支える養分の大部分は、表土とその上の植物の内部に蓄えられているので、地質は酸性で決して肥沃ではない。大木が地表に根を表す板根もそのためである。森を破壊したその跡地は赤茶けた地面が露出し、あたかもその光景は赤い砂漠さながらで、その状況をラテライト化現象という。アマゾンの熱帯林には植物約 8 万種、動物約 3000 万種が生息し、医薬品の原料となる植物の四分の一は熱帯林の恩恵として、我々は受けている。例えばレセルビンなどの鎮静剤、ピロルジジン・アルカロイドといった制癌剤の多くは熱帯植物から得られている。今後の調査で治療が不可能な病の治療薬の発見も期待できると確信する。その人類の重要な宝庫である熱帯林がここ 20 年、年間 17,000 平方 km(約四国の面積)消失している。

熱帯林の破壊は開発によるもので、2014 年にワールドカップ、2016 年にオリンピックを開催するブラジルは、政府が率先して経済優先の論理に下つき多岐に渡り開発を奨励している。正に日本の 1960 年代の高度成長期と類似し、後に公害が発生することを危惧する。1967 年に偶然発見した世界最大の鉄鉱石埋蔵量を誇るカラジャス鉱山、その「大カラジャス計画」のマスタープランは JAICA が作成した。この開発で犠牲になったのは、先住民カラジャ族の人々で、生活基盤を失い多くの野生生物が絶滅した。ブラジルは地下資源が豊富であり、その一つとして金の鉱脈も多数存在する。1980 年代から金採掘の効率を上げるために水銀を用いるようになった。1g の金を採取するには 3g の水銀が必要で、アマゾン河支流域に垂れ流された水銀の量は、水俣湾に流された 800t の水銀を大きく上回る 1200t といわれている。この被害は川の流域に生活するインディオの人に水銀中毒という結果をもたらした。また「電力部門 2010 年計画」によりアマゾン河支流域 100 箇所以上に水力ダム計画の実施を開始し、その一カ所が当団体支援対象地域周辺のシンゲー河下流に建設することになった「ベロモンチ水力ダム」である。1989 年世界銀行の融資で既にこの計画は上がっていたが、世論の反対で世銀が融資を中止し実現不可能となった。20 年後の 2009 年、またこの計画実施

が再度浮上し、当団体はダム建設撤回嘆願書の署名約 20,000 人を日本国内で集め、2010 年 1 月当時の大統領ルーラに送った。このダムはハッ場ダムの 132 個分、多摩川全長に等しい流域を塞ぎ止めるほど広大で、完成したら世界 3 番目の大きさになる。当時カヤポ族が中心となり 3,000 人近いインディオの人々がダム建設反対集会を開き、ブラジル政府に抗議を申し入れたが聞き入れられず、着工に取りかかっている。

1970 年代のオイルショックで未来を憂いた多国籍企業の自動車産業が、ハンバーガーコネクションとして牧場造成に乗り出し、熱帯林が牧場へと様変わりした。後に BSE 問題等で EU 諸国が肉骨粉を飼料として使用しないブラジルの牛肉に注目、牛肉輸出量も増加した。近年は石油の代替燃料としてエタノールの原料となるサトウキビ、トウモロコシの耕作地にするために熱帯林が破壊されている。また急速に開発し、収穫している作物として大豆があり、他国への輸出が目立ち、日本でも 20% がブラジル産である。大豆の殻を飼料として育った鶏が鶏肉として、我が国の輸入の 90% 以上を占めている。

支援対象地域であるマトグロッソ州でも、数年前まで一面森だった場所に拠点となる町が多数生まれ「大豆天国」なる町まで出現、広大な大豆畑が広がり、小型飛行機の空港も設置し、他国の業者が行き来する光景を毎年目の当たりにする。

以上の状況下にあって、1989 年から現在まで、多岐に亘って支援活動を実施している。

2. 具体的な活動内容、事業

(1) 植林事業 (1997 年～2009 年)

熱帯林は一種でも絶滅の危機に瀕すると、全体の生態系に影響を及ぼす。マホガニーやババス椰子が密猟者によって盗伐され、絶滅の危機に瀕していた。これらは高級家具材やアロマオイルとして先進諸国へ流出している。カヤポ族居住地域の乱伐跡地 700ha に 10 年間で 7 万本のマホガニーの苗木を、現地住民であるインディオの人々と協力し植林した。しかし、過酷な自然状況下で野生動物の被害や、豪雨の影響で苗木が根付かず、年間平均約 65% の活着率だったが、熱帯林の再生と活性化を目的とする事業としてはそれなりの成果があった。しかし、2008 年マトグロッソ州の消防署からの報告で、支援対象地域周辺の加速度的な森林伐採により、地中に熱が溜まり自然発火による火災が多発している事実を知らされ、このまま植林を続けていけば、火に薪をくべるようになるので植林事業を一時中断し、消防署の協力の下、インディオの自然発火防止自衛団を結成、自然発火防止事業を実施した。この年は半年間で支援対象地域 100 カ所以上自然発火が発生した。この地域は年間（雨季乾期）を通じ気温は昼は 50℃ を超え、夜は 15℃ 位になる過酷な自然状況下である。

(2) 識字教育事業 (1994 年～現在)

支援対象地域近郊に点在する金採掘場の労働力としてカヤポ族のインディオ若者が、騙され労働を強いられていた。労働者相手の地図にも無いような小さな町は酒場と売春宿が立ち並ぶ。ブラジルの公用語であるポルトガル語を話せず、まして読み書きも出来ないインディオはエイズという高いリスクを抱えインディオ村に帰って来た。外部の世界を認識しない悲

しい状況を回避すべき、カヤポ族長老ラオーニ、メガロン、そしてリーダーたちはインディオの次世代を考慮する策として、優秀な子どもを選び、一番近い町コリーデルの白人学校に数人を通わせた。しかし、キリスト教への改宗や差別の対象となり望ましい成果が得られなかった。その結果、長老から集落内での識字教育実施を強く要望され、カヤポ族の6集落に寺子屋風学校を建設し、外部からブラジル人教師を招き FUNAI（国立先住民基金：ブラジル法務省管轄）の協力も仰ぎ、インディオの子ども 270 人を対象とした識字教育を開始した。ブラジル社会で最下層に従属することなく共生するにはポルトガル語の習得が必須である。白人社会と異なる文化を維持しているインディオ社会は、文字も無く全て口頭で継承しているので、インディオの言語をアルファベットに表記することから始めた。同時に外部からの影響で独自の文化を消滅しないよう配慮した。幸いなことにカヤポ語が堪能 FUNAI の教育担当者マリア・エリーザの協力を得て、ポルトガル語のオリジナルの教科書を作成し、教科には簡単な四則計算や地理等も取り入れた。そして 1999 年からはインディオ教師育成の事業も開始し、約 10 年後には 42 人のインディオ教師が教壇に立つ迄になった。2003 年に日本の外務省による草の根支援の資金で、シングー地域の中央に位置するピアラスに多目的な学校を建設し、日本企業のさまざまな器材寄贈にも恵まれ、マトグロッソ州教育委員会がマトグロッソ州のインディオ学校として初めて正式に承認した。現在はシングー地域ほぼ全域で子どもたちが簡単なポルトガル語を話せるようになり FUNAI、マトグロッソ州政府が全面的にこの事業を支援している。

（３）養蜂事業（2010 年～2015 年現在継続中）

世界的に蜂の減少が現在問題になっている。支援対象地域は氷河期にも緑が残ったので種の避難場所となり、多種多様な生物が棲息する世界でも類い稀な地域である。しかし近隣の開発により日々多数の種が絶滅していることも事実である。そのような状況下、支援対象地域は豊かな植物群に恵まれ蜂の種は増加している。現地住民のインディオは基本的に狩猟採集の営みを行っているが、食材は豊富ではない。蜂蜜は栄養価も高く、季節ごとに植物の花も異なるためにインディオの重要な食料になる。条件は揃っていたが養蜂技術のノウハウが無かったので、現在ブラジル人の養蜂専門家ウエメルソンを雇い、現地で養蜂技術を指導することを開始した。シングー上流域の 7 部族（アウェチ、カラパロ、メイナク、ヤエアラピチ、ワウラ、カマユラ、マプチ）16 集落、養蜂者 45 人を対象に実施中である。一年間に 3 回、各地を視察し状況に対応している。事業開始して 3 年ほどだが、2013 年の蜂蜜採取量は全集落を合わせると 190kg になった。現在は住民の食料として使用しているが、未だ貨幣制度が確立していない支援対象地域が近い将来、貨幣の導入を余儀なくされる事は必至なので、余剰に採取した蜂蜜の流通と市場の確保も視野に入れ実施している。

（４）先住民経済自立事業（2000 年～2015 年現在継続中）

2000 年カヤポ族クレモロ村（432 人）を対象として野生バナナの栽培を実施した。数種類のバナナを乾燥させ、近郊の町に出荷し、経済的自立を促進する目的だったが、先住民保護区

と外部をつなぐ道が無かったために輸送手段が確保できず、空輸でしか運搬できないとなるとコストが高すぎて出荷を諦めなくてはならなくなった。しかし、この集落にとってバナナは重要な食料となった。2010 年カマユラ族の女性たちが、数年後に導入される貨幣制度に備え、インディオ工芸品の販売を発案し、現地で調達できる自然素材と、外部から購入する素材で様々な工芸品を創作し、現在、販売ルートを検討中で、日本国内でも展示開催予定である。また 2012 年は絶滅に瀕している菓草の再生や、食材となる芋や果物の女性協同の畑事業を約 200 人の女性たちの意見として提案され、2013 年 8 月から開始、遂行中である。収穫した作物は、マトグロッソ州教育委員会が支援する村の学校給食の食材として販売し、その資金は村の女性組織にプールすることになっている。女性自らがインディオ社会の未来を描き行動を起こすことは、頼もしい限りである。当団体スタッフも全員女性である。

（５）先住民文化保存事業（1995 年～現在）

約 500 年前まではブラジルには先住民しか居なかった。ポルトガルがこの地を侵略し、当時は 1000 万人近く存在していたインディオは、現在 38 万人まで減少してしまった。ブラジルの繁栄はインディオの血と涙を礎に築いたといっても過言ではない。その先住の民がブラジル憲法で初めてブラジル国民として認められたのが 1988 年だった。他者を犠牲にしてまで発展することを望まず、独自の文化を継承し、自然の摂理に従い生きてきたインディオの文化を、より多くの人に理解してもらうことを目的とした「インディオ展」をサンパウロと日本で展開した。支援対象地域の 2 部族（カヤポ族、メイナク族）の文化を紹介するイベント（1999 年 4 月、2002 年 4 月、2001 年 4 月、2004 年 7 月）を催した。4 月が多い理由はブラジルの「インディオデイ」が 4 月 19 日だからである。その際、本、CD、ビデオも製作した。また 2007 年 5 月にカヤポ族長老ラオーニを日本に招待し、広島において講演会、シンポジウム、展示会を行い、約 3000 人が参加した。同年 7 月は川崎市の岡本太郎美術館において 2 ヶ月間インディオ展を開催し、約 8000 人が来館した。2014 年再度、インディオの長老を招いた。

（６）緊急医療支援事業（1992 年～現在）

外部から持ち込まれた感染症（インフルエンザ、コレラ、結核、麻疹、マラリア、デング熱等）の緊急対策として随時多岐にわたり行っている。1992 年と 1993 年にカヤポ族バウ地域の近郊にある金採掘場から流出する水銀で川が汚染され、魚を食するインディオが水銀中毒の危機にさらされ、早急に水銀中毒に関して権威ある故・原田正純先生に助言を頂き、妊婦を優先的にバウの住民 250 人を調査した。髪の毛からかなり高い水銀の含有量が検出されたが、内政干渉にもふれる微妙な問題だった為に 2 年間でこの事業は打ち切った。

以上